

祝 齋宮 日本遺産認定 !!

さいくうあと通信
号外

文化庁が新たに創設した制度「日本遺産」に、
明和町が申請した「祈る皇女齋王のみやこ 齋宮」
が平成 27 年 4 月 24 日に認定されました。

日本遺産とは、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを認定するとともに、ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある有形・無形の文化財群を地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内外に発信することにより、地域の活性化を図る制度です。

詳しい事業の内容は決まっていますが、町では日本遺産認定を受けて、日本唯一の特色のある齋宮跡を知ってもらえる絶好の機会を活かし、国内のみならず国外からの来訪者数の向上を図るべく、国の補助金を活用し町の活性化につなげる事業を行っていきます。



日本遺産の認定結果を発表する下村博文文部科学大臣
40 都道府県、238 市町村の応募から、平成 27 年度は 18 件が認定され、三重県では唯一です。

<ストーリー要約>

古代から中世にわたり、天皇に代わって
伊勢神宮の天照大神に仕えた「齋王」は、
皇女として生まれながら、都から離れた伊
勢の地で、人と神との架け橋として、国の
平安と繁栄を願い、神への祈りを捧げる
日々を送った。

齋王の宮殿である齋宮は、伊勢神宮領の
入口に位置し、都さながらの雅な暮らしが
営まれていたと言われている。

地元の人々によって神聖な土地として守
り続けられてきた齋宮跡一帯は、日本で齋
宮が存在した唯一の場所として、皇女の祈
りの精神を今日に伝えている。



齋王まつり 「禊の儀」

※(全文は裏面に掲載しています。)

日本遺産認定ストーリー 「祈る皇女齋王のみやこ 齋宮」

齋王—それは、およそ 660 年という長きに亘り、国の平安と繁栄のため、都を離れ、伊勢神宮の
あまてらすおおかみ
 天照大神に仕えた特別な皇族女性のこと。そんな齋王が暮らした地、齋宮。伊勢神宮でもなく都でも
つつ
 ない。慎ましやかでありみやび雅やか。齋宮という独特で特別な世界は日本で唯一ココだけ。ココは三重
 県多気郡明和町。

【齋王の始まり】

齋王の歴史は日本神話の時代まで遡る。語り継がれる伝説の初代齋王は、天照大神の御杖代であつ
みつえしろ
 た豊鍬入姫命。そのあとを継ぎ、天照大神の鎮座される場所を探し諸国を旅し、伊勢の地にたどり
とよすきいりひめのみこと
 着いた倭姫命。倭姫命は、伊勢の地（現在の明和町大淀）に入り、佐々夫江行宮を造り、カケチカ
やまとひめのみこと
 ラ行事の発祥となる伝説をつくった。これが齋王と明和町との縁となったのか、齋王制度が確立し、
ささふえあんぐう
 齋王が天照大神に仕えた場所・齋宮は、伊勢神宮からおよそ 15 km 離れた伊勢神宮領の入口につくら
 れた。

【都から齋宮へ】

齋王は飛鳥時代に制度が確立して以降、天皇の即位に伴つて、未婚の内親王または女王から占いにより選ばれた。選ばれた齋王は、家族と離れ、慣れ親しんだ都での生活とも別れを告げ、200 人余りともいわれる従者に伴われて、齋王群行と呼ばれる 5 泊 6 日の旅により、齋宮へ向かう。この旅は齋王にとって神に近づく禊祓の旅である。聖なる神領の入り口に流れる川、みそぎはらえ禊川で齋王は最後の禊を行い、齋宮に入る。



平安時代の群行路・帰京路

【祈る齋王】

齋宮に住まいを移した齋王が伊勢神宮に赴くのは、9 月の神嘗祭、おもむ 6 月、12 月の月次祭の年 3 回のみ。9 月の神嘗祭に奉仕するため、かなめさい 8 月に身を清めたと言われている尾野湊御禊場跡が大淀の海岸に残っている。それ以外の日々は齋宮で厳重な慎みを保ち、祈りの日々を過ごしながら、神と人との架け橋となっていた。

【齋王と王朝文学】

神に仕える身であるがために、恋愛を禁じられていた齋王。恋ゆえに齋王を解任されたり、恋人と引き裂かれたりという悲話も多く伝えられている。そんな齋王の悲恋をテーマにした物語が『伊勢物語』である。69 段「狩の使」には、在原業平と齋王の一夜の出会いが描かれており、齋王が在原業平との別れを惜しみ、歌を詠み交わありわらのなりひらしたという故事にあやかっなりひらまつて、大淀にある松を業平松と呼んでいる。齋王の儂き恋物語の世界が舞はかない降りる美風景が今も広がっている。

また、『源氏物語』には齋王をモデルとした人物が登場する。光源氏をめぐる葵の上と六条御息所の攻防は『源氏物語』の中でも有名なシーンであるが、この六条御息所は最終的に齋王に選ばれた



祈る齋王像（齋宮歴史博物館蔵）

娘と一緒に伊勢に向かう。つまり齋宮で暮らすことになる。これは、実際に娘に付き添って齋宮に赴いた^{よしこじょう のりこないしんのう}徽子女王、^{たかこじょう あつこないしんのう}規子内親王親子がモデルとなっている。他にも「竹河の段」には、今も残る齋宮の地名、「竹川」が登場する。「竹川」にあった花園には、四季の花が植えられ、齋王も楽しまれていたと伝えられている。他にも、『大和物語』『更級日記』『栄華物語』『大鏡』などの作品に齋王・齋宮が登場している。

【齋宮での暮らし】

齋王の齋宮での暮らしは、祈りを捧げる慎ましやかな生活の一方で、十二単を纏い、貝合わせや盤すごろくを楽しみ、歌を詠むといった都のような雅やかな生活をしていた。齋王の身の回りの世話、庶務などを 50 人近くの女官が行っていたことは、齋王の地位の高さをしめしている。また、齋宮寮と呼ばれる役所に勤める官人を中心に総勢 500 人以上の人々が齋宮で執務をしており、天皇の代理である齋王が暮らす齋宮は、都から訪れる人も多く、近隣の国からもさまざまな物資が集まるなど、この地方の文化の中心地の一つだった。



伊勢物語図色紙 (齋宮歴史博物館蔵)

【齋王の解任】

齋王制度が続いたおよそ 660 年の間に、60 人以上の齋王が齋宮に赴いた。天皇の崩御や譲位によって新たな天皇に代わる時と、肉親が死ぬなどの不幸があった時、齋王自身の病などにより齋王は交代となった。赴任を終え、無事に都に帰った齋王もいれば、齋宮で亡くなった齋王もいる。彼女らのお墓は「^{たかこじょう}隆子女王の墓」「^{あつこないしんのう}惇子内親王の墓」として伝承され、今も大切に管理されている。

【幻の宮】

さまざまな史実や逸話・伝説を生みながらおよそ 660 年間続けられてきた齋王制度も、南北朝の時代以降、国内の兵乱のために廃絶してしまう。古の制度は歴史の中に埋もれ、地名として姿を残すも、齋宮は「幻の宮」となってしまった。幻の宮になりながらも、齋宮に住む人々は、先祖代々語り継がれてきた齋王・齋宮の存在を信じ、齋王の御殿があったとされる場所を「齋王の森」、齋宮の人々に親しまれている竹神社を「^{ののみや}野々宮」と呼び、神聖な土地として大切に護り後世に伝え残してきた。

【蘇る齋宮】

そんな幻の宮・齋宮が^{よみがえ}蘇ったのは昭和の時代に入ってから。発掘調査により、齋宮の存在が確認され、昭和 54 年に国の史跡「齋宮跡」として指定された。発掘調査によって都のような^{ほうかくちわり}「方格地割」という^{ごばん}碁盤の目状の区画道路を備え、伊勢神宮の社殿にも類する 100 棟もの建物が整然と並んでいたことが明らかになった。他にも^{りよくゆうとうき ていきやくけん}緑釉陶器や^{ほくしよどき}蹄脚硯、^{さいしよくぐ}墨書土器、祭祀用具の出土により、齋宮では都のような雅やかな生活が営まれていたことや、常に清浄を求め、禊を行っていたことが裏付けられた。



齋宮成立期と方格地割の位置図

今も続く、齋宮究明の発掘調査。すべて調査し終えるまであと 200 年以上かかるとされている。齋宮—そこには、古から現在までたくさんの人々のたくさんの祈りが込められている。ココ「齋宮」は、未来に続く人々の想いが溢れている。

日本遺産 「祈る皇女斎王のみやこ 斎宮」 を構成する文化財



斎宮跡 《国史跡》



斎王の森

斎宮跡出土品
《国重要文化財》



たけじんじゃ ののみや
竹神社 (野々宮)



はらいがわ
袂川



たけがわ はなぞの
竹川の花園

たかこじょう
隆子女王の墓



さいおうのみなどおんみそぎばあと
斎王尾野湊御禊場跡



おおよど
大淀



なりひらまつ
業平松

ささふえ あんぐあつと
佐々夫江行宮跡



カケチカラ発祥の地



あなたのお住まいの近くにも文化財が…
あなたはいくつご存知ですか。